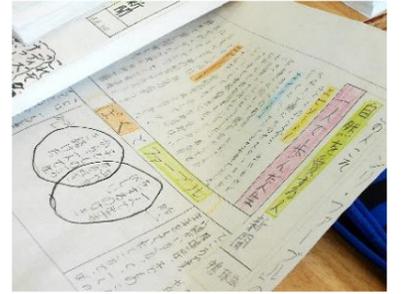


単元名 「この人こそ〇〇」新聞で交流しよう 全9時間

教材名 「手塚治虫」(東京書籍5年)

身に付けさせたい資質・能力

〔思考力・判断力・表現力等〕 C 読むこと	考えの形成	オ 文章を読んで理解したに基づいて、自分の考えをまとめること。
	共有	カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。
〔知識及び技能〕 (1)言葉の特徴や使い方に関する事項	語彙	オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。



資質・能力の分析について～語彙の充実が国語科として質の高い「自分の考えをまとめる」ことを可能に～

◆付けたい力：伝記に書かれた人物の生き方と自分の経験や考えなどとの共通点や相違点を明らかにしながら、自分の考えをまとめる力

【言語活動】複数の伝記を読み、自分の心に最も響いた人物の生き方について、『この人こそ〇〇』新聞(「エピソード」「わたしと〇〇」「これぞ名言」の3部構成)を作成し、友だちと交流する。

【言葉による見方・考え方】

・心に響いた人物を表現するためにふさわしい言葉はどれだろう。  
・「感動した」よりも、もっと心がひかれたことが伝わる言い方にしたいな。

言葉の意味・働き・使い方等を吟味させる

\*指導の手立て：様々な状況で使う語彙の一覧(右表)をノートに貼って、いつでも言葉を取り出すことができるようにし、語彙の拡充を図った。

◆授業を通じた児童の姿：ノートを何度も見て自分の表現したい思いと言葉を行き来しながら「感銘を受けました。」と(質の高い学びの実現) いう質の高い言葉を選んで使い、まとめたものを読み返して納得する児童の姿が見られた。

- 共感した時に使う語彙 人物を表現する語彙
- ◆印象に残る
  - ◆感動する
  - ◆輝いている
  - ◆心をゆさぶる
  - ◆衝撃を受ける
  - ◆感銘を受ける
  - ◆心に響く
  - ◆胸を打たれる
  - ◆印象に残る
  - ◆立派だ
  - ◆信念をもった
  - ◆不屈の
  - ◆先駆者(ハイオテ)
  - ◆芸術家
  - ◆挑戦者(チャレンジャー)
  - ◆プラス思考
  - ◆熱血
  - ◆冒険家(アドベンチャー)
  - ◆ヒーロー
  - ◆勤勉家

授業構成・授業展開について～主体的・対話的で深い学びにより、資質・能力を育成するために～(8/9時間目)

主体的な学びへ

主体的な学びの姿を実現させるためには、単元のゴールをより「自分事」にし、学習に向けて目的意識を明確にさせる必要がある。その方法として有効なもの一つは、『どんな～にしたいか』を各単位時間の始めに問うことである。本時の展開では新聞の「これぞ名言」コーナーをまとめるにあたって、作成途中にしている教師のモデルを意図的に提示した。そこから子供たちは「人物の名言は、どんな生き方から生まれてきたのか」と伝記の人物に寄り添った読みの必要性を見出し、課題意識を持って取り組んでいった。生き方が書かれているところを見つけたら付箋を貼り、そのページを前後させながら何度も読んだり、ページを見せ合いながら友だちと対話したりして主体的に学ぶ姿が見られた。

対話的な学びへ

交流・対話において、学びを広げたり深めたりするには、「どこからそう思ったの?」「例えばどんなこと?」等の問い返しが重要である。本時では「人物の名言と生き方とのつながり」、「名言についての自分の考え」を視点として交流する場を仕組んだ。「〇〇の名言について…と考えているんだけど。理由は……」。すると、対話の相手から「他にもいくつかエピソードがあるのに、どうしてそれを名言に選んだの?」「名言としては長すぎない?」「要するに、～ということ?」等の問い返しやアドバイスがあり、自分の選んだ図書を読み返して新たな考えに再構築することができた。自分の選んだ人物のエピソードを、自作の新聞によってコンパクトによりよく表現するというゴールイメージを明確にもたせることによって、対話にも必然性が生まれた。



〇〇の名言は生き方からすると、～という言葉なのか、それとも…という言葉なのか迷っているんだけど、どう思う?

深い学びへ

深い学びの実現のためには、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら、思考の過程をたどりつつ、自分が理解したり表現したりした言葉を問い直すことが重要である。本時の交流の中では、「豊臣秀吉と私の考えは似ています。例えば～」という思考に関わる語句を使って説明した友だちの意見から、新たに伝記の人物の「生き方」や「考え方」について、経験を入れることよさを捉えた。そして、改めて自分の思考の過程をたどり、経験と比較したり、表現し直したりして、対象と言葉を行き来することで言葉への自覚が高まった。このように、どんな対話をしたことによるのか、友だちのどんな問いかけでよりよい表現の仕方に気付くことができたのかを交流させることで、「言葉による見方・考え方」を共有させることも、学びを深めるための手立てとなる。

つまり～さんが言いたいことは、ここに書いているこういうこと?



よりよき学びを実感させる工夫について～学びを自覚させる振り返りへ～

学びの深まりを実感させるために、自分の学びを振り返らせることが有効である。その際、振り返りの視点を焦点化することによって1単位時間で付けたい力へ向かい、児童自身ができるようにしたことを説明したり評価したりすることで、学びを自覚できるようにすることが必要である。例えば振り返りの際、「これからの読み方は…」と書き始めを統一する、新聞にまとめるときに役に立った友だちの言ったことや考え方を入れながら書くようにする、他の場面や生活の中で使えそうなことを書く、「はじめのベン図と比べると…」と比較検討を加えたり、自分の考えの変容を書くように要求したりする等々、仕組むことである。本単元において、付けたい力は人物の生き方と自分の生き方の共通点や相違点を明らかにしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることであったが、児童のはじめの読みは人物の行動のみに着目し、書かれている事実と自分を比較するような、広がりのない浅い読みだった。そこで「なぜ伝記の人物は、そこまでして〇〇をしたのだろう。」「こんなとき(伝記の人物)だったらどうするかな…そこで出てきたことが『生き方』だね。」と対話させたり、確認させたりする手立てを講じた。これによって、叙述を基に生き方を考えようとする児童が増え、付けたい力にせまっていくことができたのではないかと考える。

★児童の振り返りより…交流で〇〇くんから、坂本龍馬の伝記について「はじめの龍馬の生き方(泣き虫)と終わりの龍馬の生き方(日本を変える)がちがっているよ…」ということを知り、なるほど…と思いました。次に伝記を読むときにはこのポイントに目を付けて読みたいです。



坂本龍馬の『この人こそ永遠のヒーロー』新聞